

「 「防災」 で深まる絆 」

徳島県 阿南市立那賀川中学校 2年 松尾 つばさ^{まつお}

「今、会社を休んで消防団のみんなと一緒に近所の行方不明男性を捜索中。後で連絡する・・・。」岡山に住んでいる親友から母へのメール。スマートフォンを見つめる母。「大丈夫かなあ。見つかってほしいけど、探しているときに二次災害に遭ったら。…」親友のことが心配で打ったメールへの返信内容を食い入るように確認した母は思わずつぶやいた。今年の6月28日から7月8日にかけて西日本を中心に全国広い範囲で被害をもたらした「平成30年7月豪雨」の時のことだった。

平成最悪の水害と報道されたことで、私自身もいたたまれないような不安な時間を過ごしている。家族みんなで同じ部屋に集まり、テレビやラジオなどの報道に釘付けになりました。母はテレビで「土砂災害特別警戒情報」が発令されると、すぐ発令された場所に住んでいる友人に連絡をとる。いつも「大丈夫」といった返信がほとんどで、今回のような連絡は初めてだった。悩む母を目の前にして私も心配でならなかった。

中学生になり、作文の題材取材をきっかけに、土砂災害防止等のために何ができるかを私なりに考えるようになった。もちろん私だけの力では大きなことはできないし、自然災害を避けることは不可能だと分かっている。しかし、誰かを頼りにし、手をこまねいてはだめだと思う。まず「知ること」や「動くこと」から始めたいと思った。

私の暮らす那賀川町は一級河川「那賀川」の河口に位置している。調べて驚いた。今回の「平成30年7月豪雨」で期間内の総雨量が500ミリメートル以上となった地域のデータリストに那賀川上流の「那賀町木頭」が入っていたのだ。さらに驚くことには、その総雨量は大規模な土砂災害に遭った岡山県の2倍以上の1365.5ミリメートルもあった。徳島県でも山間部に位置する三好市で山腹の崩壊があり、避難指示が出ていたり、災害対策本部が設置されたりしたこともわかった。私の近所でも倉庫の一部が損壊したと知り、山間部でなくても危険は存在することを改めて実感し震える思いをした。

先日、玄関に置いてある防災バックの中身をチェックした。中には「防災訓練の通知とパンフレット」が入っていた。同居している祖父が入れたものらしく、そのときのことを聞いてみると「ひいばあちゃんのために参加したよ。」と前置きして祖父は話してくれた。私は7人家族で、家には2年前から寝たきりの曾祖母がいる。

訓練は地元の小学校で行われ、心肺蘇生法やAEDの使い方などの講習の後、防災に関する講演を聞いた。質疑応答の時間に祖父は手を挙げ、「寝たきりの高齢者や腰が悪いものも含め家族みんなですぐ避難できるアドバイスがほしい」と尋ねたそうだ。私はそれを聞いてハッとした。私も土砂災害に対する知識や避難方法は訓練や授業である程度学習している。しかし、「自助・共助」を考える時、家族等の実態に合わせたより具体的な計画を立てることが大切だと気付かされたからだ。改めて家族全員が迅速に避難できるように家族会議を呼びかけた。「どうやって曾祖母を家から出して車に乗せるか」「必ず持っていかなければならない物は何か」など曾祖母の事だけでも多くの問題が話し合われた。気象庁や自治体は「早めの避難」をいつも呼びかけているが、避難に時間がかかると予想される私たち家族にとって「実情に合った避難の仕方」を今後も考えていきたいと思っている。

家族会議以降、私は定期的に防災バックのチェックや天気予報・気象情報に気を配るようになってきた。それと同時に曾祖母に毎日声をかけるようにもなった。常にお互いに関心を持ち声を掛け合うことこそ、土砂災害を含めたあらゆる災害から自分たちの命を守る防災の基本だと思うようになったからだ。